京都文教大生による宇治商工会議所会員企業・団体紹介〔第 40 回〕
～社会人0年生の私たちが見つけた企業と地域の魅力～

2026 年 11

地域連携学生プロジェクト lemon tree × 京うどん 三よしや

地域とともに、三方よしの心で〝おいしさ〟を紡ぐ

認知症について多世代での理解を深める活動を行う「lemon tree」が、県通りに店舗を構える「京うどん 三よしや」の店長　田中 隆さんを取材しました。

【地元に愛される うどん屋を〝継ぐ〟】

昭和53年に宇治市小倉で創業した「三よしや」は、地域に長く愛され続けているお店です。今回取材した田中さんは、二代目店主としてその味を守っています。

丹後出身の田中さんは、高校卒業後は警察官となり家計を支えようと考えていました。しかし、母親の強い希望もあり、東京の大学へ進学。下宿先となったうどん屋でアルバイトをする中で、後に妻となる「三よしや」の娘さんと出会い結婚。三よしやを継ぐことを決意します。

三よしやは、2017年に現在の県通りに移転。その時期に田中さんが二代目店主となりました。創業当時から続く義父から受け継いできた伝統のおだしは、素材にこだわり時代に合わせて進化を重ねながら、今も変わらず愛される味となっています。



↑インタビューに答える田中さん

【心地よいお店づくり】

三よしやの客層は、地元の方と観光客が半々です。顔見知りが来てくれた時は感謝の気持ちを態度で表すことが大切ですが、馴れ馴れしくならず、一定の距離間を保つことを意識しています。一見さんも馴染み客も、家族連れもお1人様も、誰もがゆっくり食事ができる雰囲気をつくることが大切です。この田中さんの思いをスタッフも大切にしており、車椅子の方が来店されるとすぐに手助けをしたり、外で入店待ちをされている方には日傘を渡したりと、細やかな心配りをしています。現在スタッフは7名いますが、10年くらい続けている方もいるそうです。三よしやには「接客マニュアル」というものはありません。スタッフ同士で教え合うなど、自主的に働いてくれる雰囲気があり、それが居心地のよい店舗づくりやスタッフ同士の仲の良さに繋がっているのでは、と田中さんは話します。

【仕事をする上での大切な思い】



↑取材中の様子

「三よしや」という店名は、「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」の「三方よし」に由来しています。移転当初は、今のように観光客が多くなく、客足の伸びない日も多くありました。その時店に通ってくれたのは、小倉の時からの常連さんと現店舗の町内の方でした。田中さんは移転後すぐに町内会に加入。現在も来店頂いたり、声を掛けて頂いたり、町内や地域の方々には本当に感謝していると話されます。

「一杯のうどんを作れることに感謝し、皆様の日常に寄り添うお店でありたい」という理念を大切にしている田中さんは、「きょうと食いく先生」として、宇治市内の小中学校でうどん教室を開いたり、「宇治市認知症アクションアライアンス（れもねいど）」の加盟企業に登録したりと地域と根差した活動に多数参加されています。三よしやを通して、来てくださるお客様、お店を支えてくれるスタッフ、そして地域が「よし」となることを願い日々仕事に打ち込まれていることが分かりました。

【今回の取材先】

京うどん 三よしや
（宇治市宇治妙楽4-10）



1978年、宇治市小倉で、うどん、そばや丼ものなどを提供する「めん処 三よしや」として、田中さんの義父が創業。2017年、県通り（中宇治）に移転。現在は、「京うどん 三よしや」として営業を行う。

【今回の取材担当】

地域連携学生プロジェクト
lemon tree

多世代での理解を深め、認知症を〝他人事〟ではなく〝みんな事〟あるいは〝自分事〟に。
宇治市認知症アクションアライアンス（れもねいど）に参画し、「認知症当事者やその家族にとってやさしいまち宇治」の実現に向けて寄与しています。



今回取材、記事作成を担当した学生たち。左から島田 結衣さん（臨床心理学部1年次生）、山崎 瑠虹さん（臨床心理学部2年次生）、赤井 奏喜さん（臨床心理学部1年次生）、田中 隆さん